

発表題目：移動するホーム——故郷と難民キャンプにおける場所のつながり

所属： 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター

氏名： 村橋 勲

1200字程度で発表内容を記載してください。

治安が不安定な故郷を離れ、難民キャンプや避難先の都市に長期間にわたって避難生活を続ける人々が、血縁、地縁、宗教、言語、民族などのつながりを基に共同体を形成する事例は少なくない。本発表では、人々の感情や社会関係、共同体の記憶が埋め込まれた生活領域をホーム(home)という言葉で表し、1)人々が「一時的な避難先」とされる難民キャンプにどのようにホームを作るのか、2)避難前の故郷と移住先のホームとがいかなる関係性を持っているかについて考察する。

ホームは、移民・難民研究における中心的な概念であるものの、移民・難民の出身国や彼らの生まれ故郷である町や村を指す用語として用いられることが少なくない。また、失われた故郷と移住先の住処は、しばしば二項対立的に捉えられ、故郷への帰還を理想化する国家中心主義的な見方を踏襲する例も少なくない。それに対して、本発表では、ホームを、特定の土地に固定された静的な空間ではなく、人々が移動の過程で創出する動的、複雑かつ矛盾に満ちた流動的な空間として捉える。つまり、ホームとは移民・難民が移動の過程で創出、解体、改変させる複数の場所を指す。ここで問題となるのは、ヒト、モノ、資本、情報が、複数のホームの間をどのように移動し（あるいは移動できないことで）相互の関係性と変化が生まれ、変化するののかということである。

本発表では、南スーダンのロピット(Lopit)の人々が、故郷の集落と難民キャンプで創出したホームを事例としてとりあげる。ヘレン・テイラーは、移民・難民にとってのホームの意味を、空間的、時間的、物質的、関係的という4つの側面から考察しているが、ここでは、ロピット人にとってのホームの意味を、彼らの日常のかつ儀礼的な実践から、空間的かつ物質的な側面において捉えたい。空間的な側面とは、居住や社会的活動が行われる領域——たとえばストリート、儀礼広場、教会など——を指す。とくに儀礼広場は、ロピットにとって親族、友人の生死と共同体やサイクルを象徴する儀礼を行う空間として不可欠である。発表では、故郷と難民キャンプにおける儀礼を例に2つのホームの関係性を考える。また、物質的な側面とは、故郷の味、匂い、音に関する感覚的な記憶や想像力を呼び起こす「有機的なモノ」を日常的に作り、使うことを指す。これには、食べ物だけでなく、儀礼に使う道具の製作と使用なども含まれる。

本発表の基となる調査は、南スーダンの故郷とケニアの難民キャンプという2地点での調査に基づく。この調査は、研究者自身が、南スーダンにおける国内紛争や新型コロナウイルス感染症の拡大により現地への入域が制約されたことにより、調査地の変更や遠隔での調査を迫られるという状況において行われた。そして、移動の強制と制約は、紛争下／コロナ禍にあるロピットの人々も経験したことでもある。発表の最後では、20世紀後半におけるロピット人に移動と定住のサイクルが、場所と文化の関係にどのように影響しているのかについて考察する。